

港町の成立過程をめぐつて

宇佐見隆之

Process of the Formation of Port Towns

はじめに

- ①港町の成立の契機
- ②三つの港町の成立
- ③港町の展開
おわりに

【論文要旨】

近年の流通・都市研究の中で、中世の代表的都市形態として示されることの多いのが、寺内町であり、港町である。だが寺内町に比べ港町への論及は少ない。ここでは、港町の成立の時期とその展開について、水上交通の発展を通して検討する。

【延喜式】に見えるように、水上交通が主要ルートとして古代から用いられていたのは北陸道と瀬戸内海地域であった。それに比して、山陰や東海の水上交通の発展は遅れていたが、二世紀末頃に水上輸送が確認されはじめ、一三世紀後半から一四世紀にかけて、水路による大量輸送が行われていることが確認できる。そしてこの大量輸送の時期については、莊園制の展開によるためか、先に発達した地域もほぼ同時期であった。主要な港町は、この大量輸送が開始された頃に存在が確認され、また新たな港や町の開発が行われていることが分かり、この時期を港町の成立の第一段階とすることが出来る。そして、この段階では、河口を利用した港の例が多く、港の自然的

立地条件が優先されて港町が作られていた。

次の変化は、瀬戸内地方が一五世紀初頭に、他の地域は一五世紀後半から一六世紀にかけて訪れる。その一つは、従来からの主要港の立地の変化であり、陸上交通との連絡や後背地との連携が容易な地域に港が移されることとなる。また、年貢の運送だけではなく各地からの産物が運送の中心となるにしたがって、新たな港町が各地に登場する。これらの港の中には戦国大名が計画的に利用した港もあり、政策による港町の利用にも焦点があたられる。やがて朝鮮出兵や江戸期の城郭建設などの役負担を明らかにするために各船の数が調べられるようになり、港町は政策の一端に組み込まれ、全国的水上交通網の完成時期を迎えることになる。